



小久保 貴史/Kokubo Takafumi

出身：埼玉県春日部市

趣味：ドライブ、神社仏閣お城めぐり、ウクレレ

動物歴：犬、猫現在は猫4匹（4歳～18歳まで）

経歴/Career

有限会社皆川獣医科医院

（アイ動物医療センターグループ）

経営企画室長、教育統括責任者

エム動物病院・アイペットクリニックつくば・

アイペットクリニック日立 勤務医

株式会社コジマ

病院管理部長、病院薬剤管理部長、

コジマ動物病院つくば 院長

AHB インターナショナル株式会社

（現イオンペット株式会社）

薬剤企画室長、久御山・新三郷・日の出病院 院長

【2023年4月～現在】

学校法人佐山学園 教務長

アジア動物医療リハビリテーションセンター 院長

猫と飼い主さんが、少しでも安心して暮らせるような情報をお届けします。

【コラム】猫と蚊取り線香

こんにちは。獣医師の小久保です。

7月に入り、いよいよ夏らしさを感じる頃になってまいりました。会員の皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。この時期になると、七夕や夕暮れの空の色、日が長くなったことなどに、夏の訪れを感じる方も多いのではないのでしょうか。暑さが本格的になると、エアコンや扇風機とともに、もうひとつ気になってくるのが蚊の存在です。気がつくといつの間にか刺されていた、ということも少なくありません。蚊はメスだけが吸血するといわれており、人によって刺されやすい、刺されにくいという話を耳にすることもあります。吐いた息の二酸化炭素や体温、皮膚のにおいなどが関係するともいわれておりますが、かく

いう私は昔から比較的刺されにくい方のように感じております。とはいえ、刺されにくいからといって、夏の虫対策を気にしなくてよいわけではありません。

そこで今回は、蚊取り線香をきっかけに、猫と夏の虫対策、そしてフィラリアについてお話ししたいと思います。

夏になると、蚊取り線香や電気式の虫よけを使うご家庭も増えてくるかと思えます。猫と暮らしていると、「こうした虫対策は猫にとって大丈夫なのだろうか」と気になることもあるのではないのでしょうか。この点については、製品の成分や使い方で話が変わるため、一括して安全とも危険とも言い切れません。ただ、猫は一部の殺虫成分に敏感で、特にピレスロイド系の成分には注意が必要です。なかでもペルメトリンは猫で問題になりやすく、よだれ、興奮、筋肉のびくつき、ふるえ、けいれんなどの症状を起こすことがあります。犬用の外用駆虫薬を猫に流用するのはもちろん、犬に使用した直後に猫が接触することでも中毒が起こり得ます。

そのため、虫よけ製品を使うときは、まず猫に直接使わないこと、犬用製品を猫に流用しないこと、そして表示や注意書きをよく確認することが大切です。煙の出るタイプ、電気式、スプレー式など形はいろいろありますが、猫が過ごす空間で使う場合には換気に配慮し、猫が製品そのものをなめたり触れたりしないようにすることも必要です。置き場所や使用時間を少し見直すだけでも、安心感はかなり変わってくると思えます。

では、そもそも猫にとって蚊はどのくらい問題なのでしょう。猫でも蚊を介してフィラリアに感染することがあります。フィラリアというと犬の病気という印象が強いかもしれませんが、猫も決して無関係ではありません。

猫のフィラリア症がやっかいなのは、犬のようにたくさん寄生して初めて問題になる病気ではない、という点です。猫ではわずか1匹でも症状が出ることもあり、突然死の原因になることもあります。その一方で、検査では見つけにくいことがあります。抗原検査は主に成虫、とくに成熟した雌虫がいるときに反応しやすい検査ですが、猫では寄生数が少なく、雄だけの感染や、成虫まで育たない段階で病気になることもあるため、症状があっても抗原検査で拾えないことがあります。犬と猫で病態が違う背景には、虫体に対する反応の違いが関わっていると考えられており、そのため猫では症状の出方も検査結果も一定ではなく、診断が難しい病気のひとつです。

さらに大切なのは、室内で暮らす猫でも感染の可能性があるという点です。蚊は窓や玄関の開閉、人の出入りなどを通して家の中に入ってくることがあります。そのため、「外に出ないから大丈夫」とは言い切れません。室内で静かに暮らしている猫でも、知らないうちに蚊

に刺されている可能性があります。猫では承認された成虫駆除治療がなく、結局のところ予防の意味がより大きい病気だといえます。

ご家庭でできることとしては、まず蚊を室内に入れにくくすること、虫よけ製品は猫に配慮した使い方をすること、そして必要に応じてフィラリア予防について動物病院で相談することだと思います。網戸の状態を見直す、夕方以降の出入りを少し意識する、犬用の虫よけや外用薬が猫に触れないよう注意するといったことも大切です。人の快適さだけでなく、猫にとって安全かどうかという視点も忘れてたくないところです。

もし、虫よけ製品を使ったあとに猫がよだれを流す、ふるえる、落ち着きがなくなる、吐く、呼吸が荒いといった様子が見られた場合には、自己判断で様子を見続けず、早めに動物病院へ相談してください。また、咳や呼吸の変化、原因のはっきりしない嘔吐が続く場合にも、猫のフィラリアを含めて相談する意味はあります。人のための夏の虫対策が、猫にとっても無理のないものであるかどうか、今の時期に一度見直してみるのもよいかもしれませんね。